

種苗管理センターニュース

Center for Seeds and Seedlings, NARO

第 89 号



さとうきび原原種の収穫～鹿児島農場～
(本文4ページをご覧ください)

- 巻頭言 “農業・食品分野における Society 5.0 の実現”
- 農場便り 鹿児島農場
- 特集 【若手調査員に聞く】～いま何してる？～
- トピックス 国際種子検査協会 (ISTA) 総会に参加して
UPOV 第 52 回観賞植物及び林木作業部会 (TWO) に参加して
- 「ギャラリー」

農研機構 種苗管理センター

「農研機構」は、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構のコミュニケーションネームです。

農業・食品分野における Society 5.0 の実現 － 第5期中長期計画に向けて －



新年、明けましておめでとうございます。
本年が皆様にとって、輝かしい年となります
よう、心よりお祈り申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルスの感染拡大に
よって、我が国のデジタル化の遅れやサプラ
イチェーンの脆弱さ等の様々な課題が浮き彫
りになりました。農業・食品分野において
も、生産現場の外国人労働力不足、輸出不
振、外食やインバウンド需要の停滞等のコロ
ナ禍による課題が噴出するとともに、既に顕
在化していた担い手不足、地域社会の衰退、

自然災害の頻発、地球温暖化の進行等の課題が増幅されています。このような状況にあっ
て、菅総理は、農業・食品産業の成長を通じた「地方創生」と「輸出拡大」によって、我
が国の経済成長につなげることを表明されました。私も、農業・食品産業は、「伸びしろ
の大きな成長産業」で、地方創生を促進するとともに、我が国の経済成長にも貢献するも
のと考えております。

私は、このような農業・食品産業を取り巻く環境変化と、政府の施策に対応するため
には、農業・食品分野における「Society 5.0」の実現が鍵となると考えています。

「Society 5.0」とは、私が内閣府の総合科学技術・イノベーション会議の常勤議員とし
て策定に携わった政府の第5期科学技術基本計画の中核のコンセプトで、AI、データ、デ
ジタル技術を活用して、フィジカル空間とサイバー空間を融合することにより新たな価値
を創造し、経済発展と社会的課題の解決を両立する人中心の社会の構築を目的としたもの
です。

農研機構は、本年2021年4月に、現在策定中の第5期中長期計画の下で、今後5年

間の業務を開始しますが、この中長期計画においても、農業・食品分野における「Society 5.0」実現を最重要課題に位置付けて、

- ①農産物・食品の国内安定供給と自給率向上に貢献する
- ②農業・食品産業のグローバル競争力を強化し、我が国の経済成長に貢献する
- ③地球温暖化や自然災害への対応力を強化し、農業の生産性向上と地球環境保全の両立に貢献する

ことを目標に掲げて、科学技術イノベーションを創出する所存です。

第5期中長期計画では、これらの目標を実現するために、研究開発体制を強化します。具体的には、「アグリ・フードビジネス」、「スマート生産システム」、「アグリバイオシステム」、「ロボラスト農業システム」の4つのセグメントで研究開発を推進します。また、農研機構全体の研究開発力を強化するため、基盤技術研究本部を創設し、AI、ロボティクス、バイオテクノロジー、高度分析技術等の研究基盤技術の強化、統合データベースや遺伝資源等の共通基盤の整備を加速します。種苗管理センターでは、これまでの種苗管理業務に加え、昨年改正された「種苗法」に沿って特性調査の業務体制強化を図るとともに、4つのセグメントや基盤技術研究本部と連携して、業務の一層の高度化・効率化に努めて参ります。

昨年は、新型コロナウイルス感染拡大下において、出勤削減が求められた状況下でも、産地や出願者の期待に応えるべく、計画された原原種生産や栽培試験点数を実施しました。新型コロナウイルス問題は、なかなか収束への道筋が見えない状況にありますので、ICT（情報通信技術）を活用した業務体制を一層強化します。

農研機構は、第5期中長期計画においても、ICTの活用と連携強化によって業務の改善を徹底的に進め、関係者の期待に応えるべく、組織が一体となって業務を推進します。種苗管理に関わる皆様のご健勝とご活躍を心から祈念します。

国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構

理事長 久間 和生

害に強いいため、自然環境が厳しい琉球弧の島々では、代替の効かない基幹作物となっています。また、栄養体繁殖のため増殖倍率が 10 倍程度と低く、一度ウイルス病や細菌病等に感染すると元種を通じて感染が拡大してしまう特徴があります。そのため、健全無病のさとうきび原原種を安定的に供給することにより、琉球弧における島々の農業生産性を高める重要な役割を担っています。

さとうきび原原種は、新品種や有望系統を試験場等から苗を導入し、最初に遺伝子診断等による無病化を実施します。その後、無病が確認された苗は、網室での隔離栽培による増殖段階を経て、



さとうきびの原原種ほ場



さとうきびの薬剤散布

薬剤防除や病害虫の検定等、栽培管理徹底の下、ほ場で栽培し原原種として配布されます。

令和 2 年春植用原原種については、8 品種 (NiF8、Ni17、NiTn18、Ni22、Ni23、KN00-114、KTn03-54、はるのおうぎ)、約 50 万本、令和 2 年夏植用については、7 品種 (NiF8、Ni17、NiTn18、Ni22・Ni23、Ni27、KN00-114)、約 30 万本の 2 節苗を配布しました。そのうち、令和 2 年春植用として配布した

新品種「はるのおうぎ」については、機械化適応性が高く、株出で多収となる特性を備えていることから、生産団体や製糖工場等から、種子島での早期普及の要望が高まりました。鹿児島農場では、鹿児島県の要望に即するため、側枝苗増殖技術等による急速増殖を行い、増殖期間の 2 年短縮及び主力品種の NiF8 とほぼ同等の 13 万本弱を供給することで、新品種の早期普及をとおして地域産業の課題克服に貢献しました。

また、農研機構種苗管理センターは「農業生物資源ジーンバンク事業」のサブバンクとして、植物遺伝資源のうち栄養繁殖性植物（種子による保存ができない植物）の保存・増殖を実施しています。植物遺伝資源は、品種改良やバイオテクノロ



新品種「はるのおうぎ」

ジーンズの研究基盤として必要不可欠な素材であることから、これらを確実に保存し次世代に引き継ぐことは極めて重要な使命だと考えています。鹿児島



びわの遺伝資源保存

島農場ではその立地条件を活用して、5種類の栄養繁殖性植物（かんしょ 1,906 点、さとうきび 243 点、かんぎつ類 86 点、びわ 88 点、タカオススキ属 1 点の計 2,324 点）の保存を実施して

います。時には風速 40m/s 以上の暴風雨に見舞われる厳しい日もありますが、職員一同力を合わせて大切な「資源」の保管管理に努めているところです。

最後に種子島の魅力のほんの一時(ひととき)をご紹介します。

種子島の夜空は星がとても近く、きらびやかです。とある夜、夜空を切り裂くような轟音(ごうおん)とともに耿々(こうこう)とした塊が放たれ、やがて小さな星のひとかけらとして夜空の中に溶け込んで行きます。そんな宇宙に一番近い島のロマンチックな一夜を皆様に堪能していただける日を心からお待ちしています。

「種子島におじゃりもうせ*」。

*「おじゃりもうせ」とは種子島の方言で「いらっしゃいませ」という意味です。

(前鹿児島農場長 村上博文)



特集【若手調査員に聞く】～いま何してる？～

前号に引き続き、平成 30～31 年度に採用された調査員に「いま何してる？」と聞きました。

…いま何してる？… 後志：佐々木 秋 調査員



後志分場から羊蹄山を望む

平成 31 年 1 月に採用され、同年 4 月に北海道中央農場後志分場での勤務を拝命しました。初年度は主に種ばれいしょや土壌のシスト（センチウの卵の塊）検診などの検定業務を担当していましたが、令和 2 年 4 月にチーム編成が変更されたことに伴い、今年度からは種ばれいしょの生産を担当するチーム（種苗生産部門）に所属しています。

種苗生産部門はほ場の準備から、種いもの予措、植付、中耕培土や除草、病虫害の防除、栽培管理、収穫、選別と種ばれいしょ生産に関する作業の全般を行うチームです。採用される前は農作業というとトラクターを使った作業ばかりを思い浮かべていましたが、実際には機械でなく手作業で行う作業や記録の管理など、細々とした作業が多く、年間を通してどのような作業がありどうやって行うのか、先輩から教わりながら仕事をしているところです。特に今年度からは種ばれいしょ生産にトレーサビリティが本番導入されたこともあり、

栽培記録やロットの管理をどのように行っていくのかを皆で考えながら仕事を進めるのは、難しい面もあり、やりがいを感じています。

ところで、私が勤務している北海道中央農場後志分場は農林省後志馬铃薯原原種農場を前身として昭和 22 年に開設された歴史ある農場です。敷地は北海道真狩村と留寿都村に跨っており、尻別岳と羊蹄山に挟まれた山間に所在します。現在、農場の周辺には農場職員 9 世帯が住んでいるだけの寂しい集落ですが、かつては農場の前に商店や小学校もあった一大集落を形成していたそうです。小学校ではたくさんの人が運動会に参加し、農場職員の野球チームもあったとか。昭和 61 年までは近くまで国鉄（現 JR）胆振線が走っており、昔は最寄り駅まで馬車で移動していました。猛吹雪の中で馬車が迷った拳句、いつの間にか農場に戻



除雪作業

っていた、なんてエピソードも農場の資料の中に見ることができます。昭和 24 年に建築された旧検定室が農場内に現存する最も古い建物ですが、これ以外にも今は使われなくなった選別舎の残骸

や木製の電柱など随所に農場の歴史を感じさせるものが残っており、歴史の情緒を感じるとともに先輩たちの仕事の歴史に自分の仕事を加えられることに喜びを感じています。

さて、そんな歴史ある当農場にもトラクターに最新の GPS 測位・自動操舵システムが導入されるなど、新たなテクノロジーや手法が導入されてきています。一方で、ベテランの方が「昔はもっ

とばれいしょの病気が少なかった」「もっと土質が良かった」と言うような、好ましくない変化も起きています。当センターに採用され、農業に携わり始めてからはまだ日も浅く、技術的に至らないところも多々あるところではありますが、日々起きている様々な変化に対応もしていけるよう、精進していきたいと思えます。

…いま何してる?… 十勝：尾藤 翔太郎 調査員



生産チーム（前列中央が私です）

十勝農場業務部種苗生産チームの尾藤です。平成 30 年 12 月に種苗管理センターで採用され、平成 31 年 4 月に十勝農場配属となりました。

十勝農場は北海道の東側、帯広市に位置し、北海道内 4 農場の中で一つだけ離れた位置にあります。そのため気候も他の農場とは異なり、雪はあまり降りませんが、夏場は 35℃ を超え冬場は -20℃ を下回り、気温の年較差が非常に大きな所です。しかし、夏場は湿度が低くさわやかで、冬場は室内にいる限りは暖かいため過ごしやすいです。

十勝農場の業務部は 2 チームで構成され、両チームともばれいしょ原原種生産に関わる仕事をしています。ばれいしょ原原種の全国年間生産量は約 6 万袋（20kg/袋）で、その内約 3 割に当たる約 2 万袋を十勝農場が担っており、メイクインや男爵薯など大口の人気品種を大量に生産するため非常にやりがいのある職場です。

業務について

業務部の種苗生産チームと品質管理チームは、植え付け、掘り取り、選別などの繁忙期は両チームで協力し、それ以外の期間はそれぞれのチームで作業をしています。昨年度、私は品質管理チームに所属し、原原種と基本種の生産の違いと品質維持のための各種検査を学びました。本年度からは、種苗生産チームに所属し、ばれいしょ原原種生産工程を学んでいます。

品質管理チームでは、夏期は病害株等の抜き取り作業と、冬期は次年度植え付け予定種いもの病害検定を行います。抜き取り作業については、周辺農家によるばれいしょ病害に対する環境浄化の協力もあり、農場内の病害株の発生が非常に少な



ばれいしょ原原種の製袋積み

く、ウイルス病に至ってはほぼ発生がありません。農場としては大変ありがたいですが、抜き取りに

ついて学ぶという観点からは、もう少し実際の罹病株を見て学びたい思いもあります。冬期の病害検定はいくつかの検定項目があり、そのうちのELISA検定(酵素結合免疫吸着法による病害検定)と個別検定(種いも一つ一つから、一芽を採取し、成長させて、肉眼で無病を確認する)を担当しました。



ばれいしょの選別作業

種苗生産チームでは、夏期のほ場管理と生育・収量調査、掘り取り・選別に関わる機械のメンテ

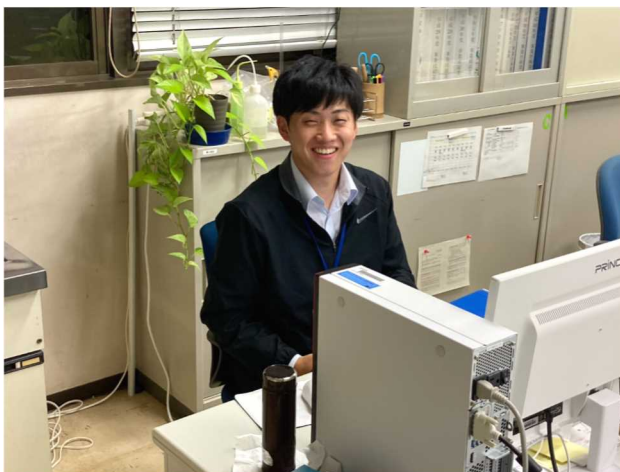
ナンスを学びました。作業中に必要最低限のメンテナンスをできるようにはなったものの、事前のチェックや故障への対応などまだまだ分からない部分が多くあります。

今後の抱負について

種苗管理センターには、私が知らない様々な業務があります。それらを学び、その中から自分の得意な分野を専門としつつ、幅広い分野に対応できるようになりたいと考えています。

十勝農場においても、まだわからないこと、できないことが多く残っており、それを一つ一つ会得していく必要があると考えています。具体的には、昨年導入されたトラクター自動運転システム(GNSS・自動操舵システム)を使って、早く一人前の運転手として機械作業を実践することです。そのために効率的に日々の業務に取り組み、作った時間で運転と農機具の取り扱いについてしっかりと練習しようと思っております。

…いま何してる?… つくば：平岡 俊樹 調査員



事務室にて

つくば本所生産連携部種苗生産課の平岡です。私は、平成30年12月1月に採用されてから3年目を迎えたところです。ここでは、種苗生産課の業務、私の業務内容について紹介させていただきます。

種苗生産課の業務

種苗管理センターでは、ばれいしょ及びさとうきびの健全無病な種苗の供給による畑作振興に貢献するため、ばれいしょ生産農場7農場、さとうきび生産農場2農場を適地に配置、種苗配布を実施しています。ばれいしょ及びさとうきびの増殖体系は、種苗管理センター(原原種)、道県(原種)、農業団体(採種)による3段階に整備されており、種苗管理センターはその起点となる原原種を供給しています。私が所属する種苗生産課では、国の定める「ばれいしょ原原種及びさとうきび原原種配布要綱(農林水産省農蚕園芸局長通知。)」に基づき、道県が希望する原原種の数量を可能な限り配布できるよう生産計画の制定、農業生産に与える影響度合いを勘案した配布価格の算出と決定等、

配布に関する事務を行っています。

また、種苗生産課では「品質最優先」の視点に立ち、品質問題が発生した場合には原因を究明し、二度と発生しないよう生産農場と連携しながら対策を講じるとともに、効率化を図るため新たな技術を積極的に導入し、パフォーマンスの向上を目指しております。

現在の私の業務内容

さとうきび生産及び配布業務全般の担当者として、生産計画の立案や配布価格の決定、生産農場の生産状況を踏まえた配布数量の調整、配布契約書の締結から配布完了までの進捗状況の把握などの業務を行っています。また、種苗管理センターが取り扱うばれいしょ及びさとうきび品種のうち、種苗法に基づき品種登録された品種における育成者権者との間の許諾に関する手続きや契約、実績報告など責任ある業務も任されています。

業務を任されたからといって一人で抱え込むのではなく、種苗生産課の上司、先輩職員に相談し、業務を遂行しています。また、私が行う業務

は外部組織又は種苗管理センター内の他部署へ報告する文書の作成、許諾契約書又は配布契約書のように期限がある多様な文書を多く取り扱っているため、行わなくてはならない業務を一目でわかるような業務カレンダーの作成、チェックリストを活用するなど、工夫して不備のないよう努めています。

お礼と今後の抱負

私は、種苗生産課でばれいしょ及びさとうきび原原種の生産から配布されるまでの流れや配布されるための事務手続き、品質問題に直面した場合の対応策など、様々な業務を経験させていただいたことに感謝しております。

今後は、種苗管理センターの将来を担う人材になることを目標に種苗生産課以外の業務も経験し、幅広い総合力を会得していきたいと思っております。当然のことながら、簡単に会得できる力ではありません。個人の能力を過信することなく、直向きに努力を積み重ね長期的に養っていけるよう積極的に行動していきます。

…いま何してる?… 鹿児島：藤田 瑠星 調査員



休憩中に

鹿児島農場業務部の藤田です。平成 31 年 4 月に採用され、本所で 3 ヶ月間の研修の後、令和元

年 7 月から鹿児島農場に配属となりました。

鹿児島農場は、鹿児島県熊毛郡中種子町にあり、鉄砲伝来の地やロケットの打ち上げ基地「種子島宇宙センター」等で有名な種子島に位置しています。種子島は本土と比べ気温の年較差が小さく温暖な気候で、釣りやサーフィン等のマリンスポーツが盛んであり、農業面ではさとうきび、コシヒカリ（日本一収穫が早い）、安納芋等の生産が盛んです。

鹿児島農場では、さとうきびの原原種生産及び遺伝資源保存業務（かんしょや柑橘、びわ、さとうきび等）を行っています。

担当業務について

私は現在、種苗生産チームに所属し、検定担当としてさとうきびの原原種生産に携わっています。さとうきびは南西諸島における農業の基幹作物ですが、栄養繁殖性であるため種苗の増殖率が低い。うえ、種苗とともに病害を拡大させやすい性質が



さとうきびの病株、異常株の抜取り作業あります。そこで、一般農家の安定生産を支えるため、さとうきび種苗の生産は、原原種（鹿児島農場）→原種（鹿児島県）→採種（県内各市町村又は農業団体）の3段階で行われています。なお、鹿児島農場内の生産については、九州沖縄農業研究センター等の育種機関から導入した品種を、温湯消毒による無病化を行った後、基本→増殖→原原種の3段階で増殖し、健全無病な原原種を鹿児

島県に配布しています。

私が担当している検定業務は健全無病な原原種の配布のために重要な業務です。具体的には、病株や異常株の抜取り（肉眼検定）や PCR 法等を用いた抽出検定、温湯消毒による無病化等を行っています。鹿児島農場に赴任してすぐに抜取りに参加する機会がありましたが、そもそもさとうきびを初めて見る状態だったため、病株や異常株と正常なさとうきびの違いがよくわからず不安を感じました。しかし、先輩職員の方々に各病害や品種を見分けるために着目すべきポイントやコツを丁寧に教えていただき、何度か経験を重ねていくと次第に抜取りができるようになり、現在ではやりがいを感じつつ業務を行っています。

今後の抱負

鹿児島農場に赴任して 1 年半が経過し、実施できる業務も増えてきましたが、トラクターを使ったほ場管理作業等、特に生産業務は未経験な業務も多いので、経験を積み技術を習得していきたいです。

また、作物の栽培は天候等の影響で計画通りに進まない場合も多いと痛感したこともあり、どのような場合でも高い再現度で安定した結果を出せるような技術を各業務で身に付けていきたいと考えています。

…いま何してる？… 西日本：浅田 奈緒美 調査員



温室にて（右から 2 人目）

西日本農場業務第 3 部の浅田です。平成最後の年である平成 31 年 4 月に採用され、つくば本所の栽培試験課で 3 ヶ月の研修を経て、同年 7 月から現在まで西日本農場に勤務しています。

実は就職活動中の際、福岡で行われた就職説明会で西日本農場の職員から説明を受け、その後、同農場の現地見学会にも参加させていただき、ここで働いてみたいと思っていました。新規採用者がいきなり栽培試験につくことはあまりないと聞いていたので、実際に配属が決まったときは

驚きました。

西日本農場は種苗法に基づく品種登録の審査のための栽培試験のなかでも温暖地向で出願数の多い植物種類の一大実施拠点です。また、夏季の気温は例年 35℃以上になるため、こまめな休憩及び水分・塩分補給等の熱中症対策を万全にしています。本年度は新型コロナウイルス感染症対策としてマスクの着用をしていたため、夏の暑さがよりつらかったです。

業務について

西日本農場に赴任した際は業務第3部の第3チームに9ヶ月所属しました。露地栽培のものが多く、アスターやストックの調査補助をしながら先輩職員から指導を受けていました。そして、令和2年4月に第4チーム所属となりました。ペラルゴニウム、ゼラニウム及びシクラメンなどと鉢栽培の植物とスイカやクサフヨウなどの露地栽培



栽培温室周りの除草

の植物を担当するチームです。私はガザニア属の栽培試験を担当しました。初めての栽培試験は周りの先輩職員からのアドバイスを受けながら実施し、対照品種の類似順位づけから報告書の提出まで行うことができました。報告書を提出したときは、自分の仕事がひとつ形になったように感じ、とてもうれしかったです。困ったときには頼りになる先輩職員がたくさんいるので、とても恵まれた環境にいると感じています。わからないことはどんどん聞いて、自分のものにできるように日々奮闘しています。

今後の抱負

西日本農場に赴任してすぐのころにセンターでの仕事は観察力が大事だと教わりましたが、この約一年半で栽培試験における観察力について実感することが出来たと感じました。かん水や薬剤散布などを植物の状態をよくみて判断することは難しいですが、経験を積んで適切な管理ができるようになりたいです。また、社会人としての生活もなれてきて、少しずつ余裕をもって行動できるようになりました。今までは指導を受けながら言われたことをやるが多かったのですが、周囲の状況をよくみて、今自分がすべきことを考えて自発的に行動できるように努力しています。最後に、仕事は人との協力によってなっているのので、些細なことであっても周囲の人への感謝を常に忘れずに過ごしていきたいと思います。

トピックス

◆ 国際種子検査協会 (ISTA) 総会に参加して

国際種子検査協会(ISTA:International Seed Testing Association)では、年に一度総会を開いて活動報告や、発芽検査等の種子検査ルールの改正案について討議し、その採択を行っています。今年は令和2年5月25日~28日にイタリアのヴェローナで開催される予定でしたが、新型コロナウイルスの影響で日程を数日に分けたオンライン会議へと変更になりました。

まず、5月19日に種子検査ルールの改正案について討議が行われました。この種子検査ルールは、国際標準法として採用されている重要なもので、改正内容によっては検査所に大きな影響を与えるため、各国の関係者は全集中の呼吸で会議に臨みました。

今年はメールによる事前質問が可能で、*Brassica napus*(ナタネ)の発芽検査温度の変更や、検査に使用するLEDライトの色温度について等、影響が大きい提案には数多くの質問が寄せられ、種苗管理センターでも国内のISTA認証検査所と検討した内容を提案しました。当日は、事前質問に対する回答だけでなく、根拠となる検証実験の背景等、さらに深い内容まで話し合わせ、時間の都合で質問者が限られている例年よりも、活発に意見交換できたと思います。



昨年はインド集合でしたが・・・

翌週の5月28日には Information Session が開かれ、最初にイタリアの種子業界について説明があり、その後ISTA事務局から予算の説明や活動報告等がありました。特に電子証書(e-certificate)については、来年から予算を投じて本格的に進めていくとのことで、気合いの入った説明をされていました。



今年の Web 会議参加者 (一部)

今は証書の台紙をスイスにあるISTA事務局に発注し、取り寄せたものに印刷・発送しているので、電子証書が可能となればよりスピーディーな対応が可能になるかもしれません。

全ての日程が終わった後、投票が必要な項目について5月28日~6月5日に各国の代表者に

よるメール投票が行われ、日本からは、種苗管理センターが投票しました。

通常は、緊張感がある中、1項目ずつ YES/NO カードを掲げて審議するので、ちょっと味気ないなと思いましたが、今年はこれまでに最も多い 48 の国と地域から投票があったそうです。昨年は 30 か国の国と地域だったので、オンラインも悪くないなと感じました。

今回は、エジプトのカイロで令和3年5月31日～6月3日に開催される予定です。開催の可否についてはまだわかりませんが、1日でも早く新型コロナウイルス感染症が終息することを願っています。

(種苗検査課 中野真紀)

◆ UPOV 第 52 回観賞植物及び林木作業部会 (TWO) に参加して

植物の新品種の保護に関する国際条約 (UPOV 条約) は、植物の新品種を各国が共通の基本原則に従って保護することにより、優れた品種の開発を促進し、農業の発展に寄与することを目的とする国際条約です。加盟国の専門家による作業部会が毎年開催されており、新品種の審査に使うテストガイドラインの作成や、品種保護制度に係る技術的事項について、検討が行われます。

令和2年6月8日～12日にかけて、作業部会の一つである観賞植物及び林木技術作業部会 (TWO : Technical Working Party for Ornamental Plants and Forest Trees) の第 52 回会議が開催されました。今年の開催予定地はオランダでしたが、新型コロナウイルスの流行のため、ウェブ会議による開催となりました。日本からは、農林水産省から中村審査官、大野審査官、沼口審査専門職、藤迫審査専門職、阿部審査専門職が参加し、種苗管理センターから私と藪内主任調査員、池田主任調査員が参加しましたので、概要を報告します。



アンズリウム

22 の国や国際機関から 70 名以上が参加した今回の会議では、日本からはアンズリウム、トルコギキョウ、ランキユラスのテストガイドライン案を提案しました。私はアンズリウムの議論を主導する役割 (LE : Leading Expert) を担当しましたが、一部形質について関心国から修正意見があったため、次回へ検討継続となりました。また、他国が LE を担当する植物の議論に

も参加し、特にスターチスについては、近年日本で新たに育成された八重品種の情報を提供するとともに、八重品種に対応したテストガイドラインの改正提案を行い、了承されました。

今回はウェブ会議という前例のない開催形態でしたが、移動なしにインターネットから参加できるというメリットもあり、種苗管理センターからも、私以外に2名の若手職員を参加させることができました。彼らにとって貴重な経験になったことと思います。

UPOV
INTERNATIONAL UNION FOR THE PROTECTION OF NEW VARIETIES OF PLANTS

DRAFT

ANTHURIUM
UPOV Guidelines
ANTHUR

Anturium Schott

GUIDELINES
FOR THE CONDUCT OF TESTS
FOR DISTINCTNESS, UNIFORMITY AND STABILITY

prepared by experts from Japan
as endorsed by the
Technical Working Party for Ornamental Plants and Forest Trees
at its 4th session, Geneva, 14 to 16 March 2007, Anturium Schott,
Geneva 2007-03-14 to 2007-03-16

Disclaimer: this document does not represent UPOV policies or guidance

Alternative names / Etimological name	English	French	German	Spanish
Anturium Schott	ANTHURIUM	ANTHURIUM	FLAMMENDOLME	

The purpose of these guidelines ("Test Guidelines") is to elaborate the principles contained in the General Introduction (document TGI/13) and its associated TGP documents, into detailed practical guidance for the harmonized examination of distinctness, uniformity and stability (DUS) and, in particular, to identify appropriate characteristics for the examination of DUS and production of harmonized variety descriptions.

ASSOCIATED DOCUMENTS

These Test Guidelines should be read in conjunction with the General Introduction and its associated TGP documents.

TGI/13/2011
ANTHURIUM/Anturium/Flammendolme/Anturium, 2011-03-13
13

7. Table of Characteristics / Tableau des caractères / Características / Tableau de caractères

	English	French	German	Spanish	Example Varieties / Exemples Variétés / Beispielsorten / Ejemplos de variedades	Notes
1. (P) DK MS	DV					
Plant height	short				ANTHUR00014	3
	medium				ANTHUR00014	5
	medium				ANTHUR00014	5
	tall				ANTHUR00014	7
2. (P) DK MS	DV	DK				
Leaf blade length	short	kurz	kurz	breve	ANTHUR00014	3
	medium	mittel	mittel	media	ANTHUR00014	5
	medium	mittel	mittel	media	ANTHUR00014	5
	long	lang	lang	larga	ANTHUR00014	7
3. (P) DK MS	DV	DK				
Leaf blade width	narrow	schmal	schmal	estrecha	ANTHUR00014	3
	medium	mittel	mittel	media	ANTHUR00014	5
	medium	mittel	mittel	media	ANTHUR00014	5
	wide	breit	breit	ancha	ANTHUR00014	7
4. (P) DK MS	DV	DK				
Leaf base shape	flat	flach	flach	plano	ANTHUR00014	3
	low	niedrig	niedrig	bajo	ANTHUR00014	3
	medium	mittel	mittel	media	ANTHUR00014	3
	tall	hoch	hoch	alto	ANTHUR00014	7
5. (P) DK VS	DV	DK				
Leaf blade shape at base	obovate				ANTHUR00014	1
	obovate				ANTHUR00014	5
6. (P) DK VS	DV	DK				
Leaf blade shape position of base	attached to stem					1
	separated from stem					2
	separated from stem					3
	separated from stem					4

TGI/13/2011
ANTHURIUM, 2011-03-13
21

64. 17. Flower position in relation to foliage

64. 18. Flower number of apices

64. 19. Spathe length

アンズリウムのテストガイドライン案

ただ、画面越しだと参加者の顔がよく見えないため、発言のタイミングがつかみにくいという苦労がありました。また、時差の都合上、夜 10 時過ぎまで検討が続く日もあり、体力的にハードな一週間でした。

次回は、2021 年の 6 月 7 日～11 日に、今回の当初予定と同じオランダでの開催が計画されています。新型コロナウイルスの流行の先行きははまだ不透明ですが、一刻も早く収束し、各国の参加者の皆さんと直に再会できることを願っています。

(栽培試験課 中西浩司)

ギャラリー

◆トピックス【TWO】(アンスリウムの花) (本文 14 ページ)



<編集後記>

新年あけましておめでとうございます。新しい年を迎え皆様いかがお過ごしですか。今号のトピックスで海外出張報告を2件取り上げましたが、いずれも新型コロナウイルスの影響でWeb会議に変更し実施しています。記事にも書いていますがWeb会議によるメリットも発見できましたが、一日も早く、通常の生活に戻ることを願っています。(種苗戦略室)

(編集・発行) 農研機構 種苗管理センター 種苗戦略室
茨城県つくば市藤本2-2
TEL 029-838-6587 FAX 029-838-6583
ncss-info@naro.affrc.go.jp

<https://www.naro.affrc.go.jp/laboratory/ncss/>



<令和3年1月>